盛岡タイムス 24/12/8 7面

水稲の初冬直播き

生産者の関心高く

岩手大農学部附属滝沢農場で講習会

岩手大が開発した水稲栽培の技術「初冬直播き（じかまき）栽培」について学ぶ生産者向け講習会（同大農学部主催）が7日、滝沢市巣子の同大農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター滝沢農場で開かれた。県内外から生産者ら28人が参加し、春に集中する農作業の分散化を図る新技術の可能性を探った。

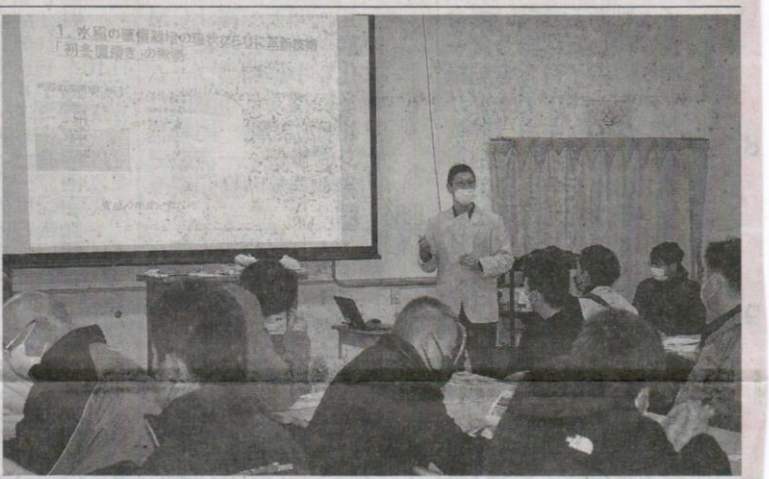
初冬直播きは、雪が降る前の11～12月に種もみを直接田んぼにまき、積雪期の「貯蔵期間」を経て翌年秋に収穫する新しい技術。同農学部の下野裕之教授（49）らが中心になって研究を進め、2018年度に農水省の大型プロジェクト「農研機構 生研支援センターのイノベーション創出強化研究推進事業」に採択された。

生産者向けの講習会は3回目。県内の生産者、農業団体職員に加え、秋田、福島、愛知などからも参加があり、関心の高さをうかがわせた。

下野教授が、「初冬直播き」の概要と現状について説明。農研機構・東北農業研究センター（盛岡市）での取り組みや八幡平市、北上市の生産現場からの報告もあった。

参加者からは、初冬直播きに使う稲の品種や、同じ乾田直播き栽培である春播きとの生育や収穫期の違い、コスト面などに熱心に質問が寄せられた。

参加したJAいわて花巻営農部遠野地域営農グループ米穀課指導販売係の菊池一彦調査役（58）は「農場従事者の高齢化が進む中、農作業の省力化やスマート農業への関心は高い。同技術についても、機械などの設備やコスト面などの勉強を重ね、生産者さんに情報を提供できるようにしていきたい」と話していた。



岩手大農学部附属滝沢農場で開かれた第3回水稲初冬直播きの生産者向け講習会

※盛岡タイムス　令和４年１２月８日付/７面

※この記事は盛岡タイムス社の許諾を得て転載しています。